

南足柄市立岡本小学校

研究テーマ：共に学びを深める子の育成

1 実践の目的

昨年度までの集団づくりの研究により培った「学習環境」を生かし、今年度はいかに学びの質を高めていくかを考え、授業改善に取り組んでいる。研究テーマを「共に学びを深める子の育成」とし、実現に向けた手立てを考えていくことは、学習指導要領で求められている「生きる力」や本市の研究テーマである「確かな学力」の向上をめざした指導の工夫・改善にもつながると考える。

2 実践の内容

(1) 集団づくりをローカル・スタディへ

今年度の実践では、「共に学びを深める子の育成」のために、昨年度までの実践をベースに修正を加えた。その1つが、学級活動（以下、学活）・学級づくりの取り組みを、部会ではなくローカル・スタディの中で、全員共通の取り組みという考え方にしたことである。年度初めの4月～7月を重点取り組み期間として、学年団ごとにローカル・スタディを通して学活の授業を見合った。

(2) 手立てをもとに部会を設定

もう1つの修正点は、授業研究（ハブ・スタディ）を研究テーマにつなげる手立てを細分化して研究していくことである。昨年度末と今年度初めに校内研究全体会で、「共に学びを深める子の育成」のためにどんな手立てを研究していきたいかを話し合った。さまざまな手立てが話題にあがったが、大きく次の3つの手立てに焦点化された。ア 発問 イ 共有 ウ 個別最適である。その後、先生方に所属したい部会の希望調査



を行い、部会を決定した。

ア 発問部会

発問部会では、発問をその用途によって分類している。「本時の目標を達成する」ために、全員を同じ土台に上げる発問、そして「学びを深める」ために、さらに掘り下げていく発問である。これらをもとに、部会では、授業検討の際に、中心発問の検討だけでなく、補助発問にも触れ、授業研究を進めていこうと考えた。

イ 共有部会

共有部会では、「共有」を2つの観点で考え、テーマとして設定した。「①目で見て共有」では、ICT機器の活用や板書計画を意識しより多くの考えに触れることや焦点化をめざした。「②言葉で伝えて共有」では、ペア活動や話し合いの隊形を工夫し、自分や友だちの考えを大切にできるような機会をつくる。共有したことを生かし、振り返りの充実を図る。考えがまとまるような「共有・手立て」を考えていった。

ウ 個別最適部会

個別最適部会では、「個別最適な授業とは、一人一人が自分にあった問い・方法・進度を選び仲間とともに学ぶことを通し

て、充実感を得ることができる授業」と位置づけた。そのため、従来の授業以上に子どもたちの視点を重視した実践となるように研究を進めている。従来の授業から切り離すのではなく、より一層子どもたちの視点に立ち、一人一人の思いや問いを大切にすることで、深い学びへとつながるように実践をしていった。

3 実践の成果と課題

(1) ローカル・スタディ（集団づくり）

学活(1)では児童主体で授業が展開されるため、これまでの日程が決まった授業研究に位置付けることに違和感があった。ローカル・スタディでは授業日のある程度流動的に設定できるようになったため、これまでよりも児童主体を大切にしながら展開していくことができた。また学年団ごとに行うことで、より近い実態の学級を参観できるため、学びを自学級に還元しやすいというメリットもあった。また授業を見合うだけでなく、学活でねらいたいことの確認や振り返り等も小集団で行えたため、学年団でのコミュニケーションの一助になったり、岡本小学校が培ってきた集団づくりに対する思いや流れをうまく共通理解することにつながったりした。

(2) ハブ・スタディ（授業研究）

授業研究を行う上で、「共に学びを深める子」とは、具体的にどんな姿なのかを校内研究全体研で話し合った。「学びを深める」とは子どもの学びが、他者の様々な考え方に触れることで広がり、他者の考えと自分の考えを比べ、自分の考えが明確になったり、自分の考えが変容（向上的変容）したり、自分一人ではもち得なかった新しい観点を得たりすること。」という言葉での定義をした。

それだけでなく、より共通理解をするべく6年生の授業での姿を全体研で見ることで、さらなる共通理解を図った。そして、その共通理解を基に各学級において授業実践を重ねたことで、南足柄市学びづくり研究に関する実態調査（4月・12月実施）においても、主体的に学習に取り組む意識が向上した。

実践することで、新たな課題も生まれているが、これらの実践により2学期から本格的に始まる授業研究の土台を作ることができたと考える。



4 今後の展開

ローカル・スタディで学活を行ったことで、他者理解や合意形成という今まで大切にしてきたことを継続して深めていくことができた。今後もまずは集団づくりによる学習環境の整備を基盤として考えていきたい。そのうえで発問、共有、個別最適という3つの手立てをもとに、「共に学びを深める子」という昨年度より一歩進んだ児童の姿をめざしていく。実践に取り組む中で、部会に分けてはいるが、それぞれの手立ては密接に関わりながら授業を構成していることを再認識することができた。各部会での学びを十分に共有しながら、学校全体でよりよい授業に迫っていきたい。